KINGCA week 2023 体験記

大阪大学消化器外科　西塔拓郎

2023 年 9 月 11 日～9 月 16 日に日本胃癌学会より参加助成を頂き、KINGCA week 2023 に参加させて頂きました。前半 3 日間は Seoul National University Hospital での Master class に参加し、後半 3 日間は韓国胃癌学会学術集会で oral presentation を行うというスケジュールでした。昨年度も Master class を含めた KINGCA week 2022 に参加する予定としておりましたが、Covid-19 の影響もあり参加が叶いませんでした。本年度は Covid-19 も昨年度よりは状況も改善しており、1 年越しでの希望が叶った形となりました。その世界情勢もあり、韓国においても人々は基本的にはノーマスクで生活していましたが、病院で患者と接する時のみはやはりマスク着用が必要とのことでした。最初の 2 日間は Prof. Yang が不在とされており、その期間は Prof. Lee に、さらに 3 日目には Prof. Yang にもご指導頂くといった贅沢な時間でした。

Seoul National University Hospital ですが、胃癌手術は年間約 1000 例が施行されている韓国屈指の大学病院です。当科の上部疾患チーフの黒川先生が以前より Prof. Yang、Prof. Lee、Prof. Park と交流があり、韓国のセンター施設での手術見学を勧めて下さったこと、また以前より 1000 件の手術を行う韓国のセンター施設の手術はどんなものかと興味を持っていたため、Seoul National University Hospital での Master Class を希望しました。本年度は参加希望者も多数いたとのことでしたが、幸いにも参加する機会を与えて頂きました。驚くことに、3 日間通して Master class よりシンガポールとマレーシアから 1 名ずつ、さらに日本より 2 名とドイツより 1 名、最終日にはベトナムから 7 名と、同時期に 13 名の見学者がいるという状況で、胃癌治療を引っ張る韓国のセンター施設の注目度をひしひしと感じました。これら見学者は胃癌手術を目指すフェローが案内してくれるのですが、韓国全体で 20-30 名程度しかいない胃癌を目指すフェローの中で 5 名が現在当施設におり、Seoul National University Hospital の韓国における教育施設としての責務と充実度もみることができました。フェローは基本的には、手術のサポートと臨床研究に従事しており、患者の管理はレジデントが担当し、手術はスタッフが執刀するという、日本とは少し異なった外科医環境があるということが非常に興味を引く部分でした。Master class では、毎日 2-3 件の手術見学を基本として、水曜に Prof. Yang（Robot 胃切除の韓国の状況について）の Lecture、月曜に Prof. Lee（Seoul National University Hospital の胃癌データベース、KLASS study、PPG について）の Lecture、入院病棟と外来診察の見学に加え、水曜朝の Surgical Grand Round（各外科チームの合同研究カンファレンス）と水曜夕の MDT Gastric Cancer Conference（多診療科のケースカンファレンス）に参加させて頂きました。特に MDT Gastric Cancer Conference は興味深く、2 週に 1 度、胃外科、消化器内科、放射線診断科、病理科、腫瘍内科が一同に会し、治療方針に悩む症例を全科で検討しようというカ

ンファレンスであり、今回は 13 例もの症例提示がされていました。非常にシステマチックな会議運営に驚くとともに、カンファレンスは完全に英語でされており、韓国人の英語での議論のスムーズさに英語力の重要性を痛感させられました。また 2 日目、3 日目夜には welcome party を開催頂き、Prof、fellow、他の見学者と親交を深めると共に、各国の医療環境の違いを知ることが出来ました。

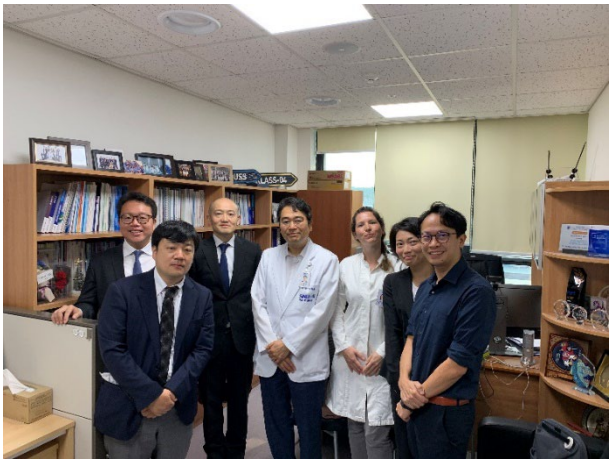
さて、手術ですが、3 日間で腹腔鏡手術 3 件とロボット手術 4 件の 7 件の手術を見学させて頂きました。1 日目が RDG、2 日目が LTG2 件と LDG、3 日目が RPPG と RDG2 件というラインナップでした。特に Prf. Lee の Lecture でも強調されていたのですが、PPG に取り組んでいるということで、その術式適応と手術方法を強調してご指導頂きました。手術の印象としては、日本での手術と大きな違いは無いと感じられ、リンパ節郭清も日本と同様の範囲の切除を行っており、back table でフェローが捌くリンパ節番号も日本と同様の番号を使用していました。手術室で違うと感じた部分は、低分化早期胃癌の手術適応、手術補助ナースの存在、でした。Prof. Yang には、自施設のデータにおいて低分化であれば大きさによらず T1a であってもリンパ節転移率が数%あったとのことより、低分化であれば T1a でも外科切除の適応にしているとご教示頂きました。また腹腔鏡手術のスコピストはどの手術でも手術補助ナースが担当しており、その完璧なカメラワークに驚かされました。韓国でも外科希望者の減少が問題となっている様であり、専門性を持ったコメディカルの育成には学ぶ部分も多いと感じました。

また学会では、oral presentation で “C-reactive protein kinetics as a predictive marker for long-term outcome of immune checkpoint inhibitors in upper gastrointestinal cancer” の発表を行いました。胃癌・食道癌の免疫チェックポイント阻害薬使用時における CRP の推移を検討した発表ですが、韓国では外科医が化学療法を担当しない様であり、外科医があまりいない様子の部屋での発表でしたが、best oral presentation award を獲得することが出来ました。他にも全てのセッションが英語での発表となっており、欧米・アジア諸国からの発表も多数あり、世界の胃癌治療における clinical question は何かという点が、非常に頭を刺激される部分でした。

今回、日本胃癌学会の海外学会参加補助制度を利用して KINGCA week 2023 に参加させて頂きました。来年度には年齢制限が出来るかもしれないとの噂を聞き、最後のチャンスかもしれないと思い応募しましたが、非常に刺激的な経験をすることが出来ました。若いうちにこのような経験をすればモチベーションを高める良い機会となるかと思います。是非、来年度以降当科の若い先生にも勧めてみようかと考えております。最後に、このような機会を与えて頂きました日本胃癌学会の掛地吉弘理事長、国際委員会の竹内裕也委員長をはじめとした委員の皆様、受け入れて下さった KINGCA の皆様、Seoul National University Hospital の Prof. Yang を初めとしたスタッフ・フェローの皆様に感謝申し上げます。今後も日本胃癌学会の海外学会参加補助制度が継続することを期待しております。

Prof. Yang（手前左）と同時期の見学者 Drs

Prof. Lee（中央）と 3 日間一緒だった Drs



Prof. Yang の Lecture

Prof. Lee の Lecture

fellow の Dr. Park（右奥）と病院内で昼食

Surgical Grand Round

Dr. Lee 執刀の腹腔鏡下胃切除の見学

韓国伝統料理屋での welcome party、海外より 15 名とフェローが参加、私もスピーチが回ってきました

KINGCA week 2023 への参加、Seoul National の先生方と